

10th International Conference on Discrete Element Methods (DEM10)  
報告記

## Report on the 10th International Conference on Discrete Element Methods (DEM10)

三野 泰志\*  
Yasushi Mino

2025年7月1日から5日にかけて、アクリエひめじ（姫路市文化コンベンションセンター）にて、10th International Conference on Discrete Element Methods (DEM10)（公式HP：<https://www.sptj.jp/dem10/>）が開催された。国際会議DEMは、離散要素法（DEM）を用いた粒子系シミュレーションの最新の進展について包括的に探求することを目的とした、30年以上の歴史を持つ国際会議である。これまで欧米を中心に開催されてきたが、今回は日本での初開催となった。本会議の実行委員長は東京大学の酒井幹夫先生が務められ、事務局は大阪公立大学の仲村英也先生と大阪大学の鷺野公彰先生が担当された。私も含め、粉体工学会に所属する多くのDEM研究者も実行委員に加わり、会議の運営にあたった。会議の詳細な様子や雰囲気については印象記に譲るとして、本稿では会議の概要やプログラムの構成を中心に報告する。本稿が、会議の全体像とともに、DEM分野における国際的な研究動向を把握する一助となれば幸いである。

本会議には、29の国と地域から326名の参加者が集まった（写真1）。DEMに関する論文数が年々増加していることは認識していたものの、DEMというテーマに特化した国際会議にこれほど多くの研究者が一堂に会する場に立ち合えたことで、改めてDEMの研究規模と技術の広がりを実感する機会となった。図1に示すとおり、海外からの参加者が全体の65%を占めており、日本国内で開催された国際会議としては非常に高い比率であった。これは、DEMに対する国際的な関心の高さを示しているといえる。

会議では、8名の著名な研究者による基調講演に加え、16件のミニシンポジウム（計156件の口頭発表）が4～5会場に分かれて並行して実施された。いずれの会場

においても非常に高度なモデル開発や解析結果に関する発表が行われており、近年のDEMの目覚ましい進展のスピードに驚かされた。さらに、会期2日目および3日目にはポスターセッションが実施され、計93件の発表が行われた。活発な議論が繰り広げられ、発表者の熱意の高さが印象的であった。本セッションでは、厳正な審査の結果、20名の発表者がポスター賞を受賞された（写真2）。また、開会前日の夜にアクリエひめじ内でウェルカムレセプション（写真3）が、初日の夜にホテルモントレ姫路でバンケット（写真4）が開催され、参加者同士の交流と情報交換の貴重な機会となった。バンケットの席上では、粉体シミュレーション国際賞（APPIE Computational Granular Mechanics Award）の授賞式も執

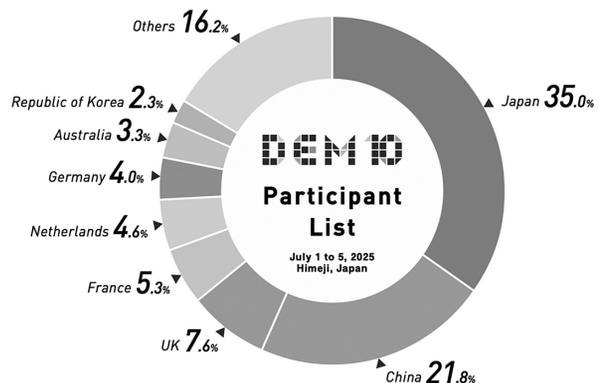
写真1 集合写真（公式HP：<https://www.sptj.jp/dem10/>より引用）。

図1 DEM10参加者の構成

2025年9月1日受付  
北九州市立大学 国際環境工学部 環境化学工学科  
〒808-0135 福岡県北九州市若松区ひびきの1-1)  
Department of Chemical and Environmental Engineering, Faculty of Environmental Engineering, The University of Kitakyushu  
(1-1 Hibikino, Wakamatsu-ku, Kitakyushu, Fukuoka 808-0135, Japan)  
\* 連絡先 y-mino@kitakyu-u.ac.jp



写真2 ポスター賞の表彰式の様子（公式 HP より引用）。受賞者の氏名・所属は公式 HP に掲載



写真4 バンケットの様子



写真3 ウェルカムレセプションの様子（白川善幸会長のご挨拶）

り行われ、基調講演者の一人である Paul Cleary 博士が受賞された。どちらのイベントにも予想を上回る多数の参加者が集まり、DEM 分野における研究者間の国際的なつながりの強さを感じた。

以下に、会期中に行われた基調講演およびミニシンポジウムのタイトルを紹介する。詳細は割愛するが、リストを眺めるだけでも DEM 研究の多様化と広がりを感じられる。

#### 基調講演一覧

- Dr. Paul Cleary (CSIRO, Australia)  
“Industrial applications of DEM, coupling to other methods to solve multiphase and multiscale problems and the importance of particle shape”
- Prof. Hans Kuipers (Eindhoven University of Technology, the Netherlands)  
“Multi-Scale Modeling of Dense Particulate Flows with Mass, Momentum and Heat Exchange -Current Status and Future Challenges in CFD-DEM Approaches”
- Prof. Thorsten Pöschel (Friedrich-Alexander-University of Erlangen-Nürnberg, Germany)  
“Discrete Elements Simulations including Fragmentation – Models and Challenges”
- Prof. Shunying Ji (Dalian University of Technology, China)

“Discrete element method for deformable particles/structures”

- Prof. Hideya Nakamura (Osaka Metropolitan University, Japan)

“Machine learning-based surrogate model of DEM simulation for particle mixing”

- Prof. Thomas Weinhart (University of Twente, the Netherlands)

“Beyond Virtual Prototyping of Particulate Processes”

- Dr. François Guillard (The University of Sydney, Australia)

“Packing and rheology of frictional hyperspheres”

- Dr. Rouven Weiler (BASF SE, Germany)

“A Decade with the Discrete-Element-Method in Chemical Industry”

#### ミニシンポジウム一覧

- Advanced Modelling & Simulation for Discrete Element Methods
- Advanced DEM Analysis in Geotechnical Engineering
- Industrial Application of DEM & CFD-DEM
- Coupled discrete element method and computational fluid dynamics
- Particle shape and its role in industrial applications
- Data-driven modeling for granular and multiphase flows
- Novel Contact Models and Advanced Physics
- Development and application of coarse-grained models for DEM
- Rheology of complex granular flows
- Non-spherical particles in industrial applications
- DEM modelling in the field of railway systems
- DEM for pharmaceutical and battery manufacturing
- DEM and Coupled Sims: Calibration of Industrial Applications
- Novel Improvements and Applications of DEM for Industry
- Modeling soft deformable particles

このように、近年の DEM 研究は CFD など他のシミュレーション技術との連成・連携、非球形粒子系、マルチスケール・多相系、さらにはデータ駆動型モデリングな

ど、多岐にわたっている。特に印象的だったのは、DEMの実用化を強く意識した研究の増加である。現実の粉体を表現するために非球形粒子を扱い、実プロセスのスケールを解析するための新たな計算手法の導入も進められていた。

次回のDEM11は3年後にイギリスで開催される予定であり（実行委員長はサリー大学のCharley Wu教授）、そこでさらに発展したDEM関連技術が報告されるだろ

う。技術の発展を楽しみにするとともに、一研究者としてその進展に少しでも貢献できるよう、本会議で得た知見や刺激を駆動力に研究に取り組んでいきたい。

最後に、本会の開催にご協力いただいた関係者および参加者の皆様に、実行委員の一人として深く感謝の意を表す。また、歴史ある国際会議の日本初開催に尽力された実行委員長の酒井幹夫先生に改めて敬意を表す。

## シンポジウム印象記 Symposium Impression

# DEM10・シンポジウム印象記

## Impression on DEM10

### DEM10・シンポジウム印象記

2025年7月1日から4日にかけて、兵庫県姫路市のアクリエ姫路にて、離散要素法（DEM）をメインテーマとする国際会議 DEM10 が開催されました。日本で本国際会議が開催されるのは初めてであり、私の指導教員でもある東京大学の酒井幹夫教授が Chairperson を務められました。会議には国内外のさまざまな国・地域から320名を超える参加者が集まり、約170件の口頭発表と約100件のポスター発表が行われました。また、26の企業・団体がスポンサーとして参画し、そのうち9団体が1日目から3日目にかけてランチョンセミナーを開催しました。

講演は、モデリング&シミュレーション、DEMの産業応用、数値流体力学との連成、粒子形状、接触モデル、粗視化モデル、変形モデル、データ駆動モデリング、レオロジー、地盤工学のDEM解析、医薬品・電池製造のDEM解析など、多岐にわたるテーマに分類され、それぞれ複数のセッションとして編成されました。この詳細な分類により、自身の研究テーマと密接に関わる講演はもちろん、直接は関連しないものの新たな視点を得られそうな講演も選びやすく、プログラム構成の工夫を強く感じました。

特に印象的だったのは、AIを活用したデータ駆動型DEMシミュレーションに関する発表です。近年のAI技術の飛躍的發展を背景に、サロゲートモデルの開発をはじめとするデータ駆動型モデルの研究が急速に広がっています。前回（DEM9）と比較して、データ駆動型モデル関連の発表が大幅に増加したことは、その潮流を象徴するものであると感じました。加えて、この分野のセッションでは質疑応答や意見交換が非常に活発かつ激しいものであったことも印象深く、現在のDEM研究における最もホットなテーマの一つであることを実感しました。

ポスターセッションは1日目と2日目の2日間わたって開催されました。私も発表者として参加し、国内外の大学・研究機関・企業の方々に研究成果を紹介でき、非常に有意義な時間を過ごしました。特に、日頃から論文を参考にしてきた海外の著名な研究者の方と直接議論できたことは、今後の研究に大きな刺激となりました。また、ポスターセッションでは上位2割の発表者に授与される「Best Poster Award」が設けられており、国内外の大学から多数の学生の方々が参加されていました。私

事ですが、私自身も「Best Poster Award」を幸運にも受賞することができ、大変光栄に思っています。

ランチョンセミナーでは、各日3団体が自社の技術や製品、DEMの産業応用事例や技術報告などについて興味深い講演を行いました。参加者には、地元の但馬牛や穴子飯など、開催地・姫路の特色あるお弁当が提供されました。さらに、休憩エリアでは日本各地の銘菓がふるまわれ、特に海外からの参加者に好評であったと記憶しております。

今回のDEM10は、私にとって初めての国際学会参加となりました。世界各国の著名な研究者による最先端の研究発表に触れられたこと、ポスターセッションでの議論を通じて新たな視点を得られたこと、そして意欲的な学生や研究者の方々と交流できたことは、今後の研究活動における大きな糧となりました。次回のDEM11はイギリス・サリー大学で開催予定とのことですが、ぜひ参加したいと考えています。

最後に、本国際会議の開催に尽力され、会期中にお世話になった東京大学の酒井先生、大阪大学の鷲野先生、兵庫県立大学の佐藤根先生、産業技術総合研究所の綱澤博士をはじめ、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。  
(東京大学 小宮 雅史)

### DEM10 印象記

2025年7月1日から5日の5日間、アクリエ姫路にて The 10th International Conference on Discrete Element Methods (DEM10) が開催された。本会議は3年に1度開催されるDEMに関する国際会議であり、8件の基調講演を含む約170件の口頭発表と約100件のポスター発表が行われた。海外からの参加者が6割以上を占め、DEMという共通の研究テーマを通じて世界とつながっていることを実感できる貴重な経験となった。

連成シミュレーション、粒子破碎、非球形粒子、機械学習、粗視化モデルなど幅広いテーマのDEMに関わる最先端の研究成果が発表され、複数のセッションで同時進行する発表の中から興味に沿ったものを選び聴講した。特に、『モデリングは目的に応じて重要な要素を選択し、犠牲となる部分を許容することで現象の理解や定量評価を可能にする』という内容に感銘を受け、モデリングにおける取捨選択の難しさを改めて考えさせられた。また、各発表後には活発な質疑応答が行われ、鋭い意見が飛び交う刺激的な空間であった。ポスターセッションには、発表者として参加し、活発な議論を経験し

た。十分に伝えきれない点もあったが、質問者の親身な対応に助けられ、新たな気づきを得られた。セッション後にも様々な領域の専門家からコメントをいただき、議論を通じて多角的な視点や着想を取り入れることができた。また、海外の研究者が積極的に聴衆に働きかけ、関心を引き寄せる姿が印象的であり、見習う部分があると感じた。さらに、世界各国の参加者によるポスターは、デザインの多様性に富み、研究内容をわかりやすく伝える工夫が随所に施されていた。自身も、より伝わりやすい発表を目指し、資料作成やコミュニケーションのスキルを磨いていきたいと強く感じた。

2日目に開催されたホテルでの懇親会では、美味しい料理を囲みながら世界各国の研究者と交流した。懇親会では、和妻（和風奇術）のパフォーマンスも披露され、

終始和やかな雰囲気の中で楽しく交流できた。特にロシアの研究者と研究環境や地理、文化について語り合えたことが心に残っており、研究以外の側面でも国際会議の魅力を感じた。

本会議を通して、他大学の研究者の成果に触れ、発表や議論を経験したことで、自らの研究の立ち位置や課題についてより客観的に理解することができた。今後は、研究活動を通じて、批判的思考力やコミュニケーション力などをさらに高められるように努力していきたい。最後に、本会議の開催にあたりご尽力された東京大学の酒井先生、大阪大学の鷺野先生、普段からご指導いただいている大阪公立大学の仲村先生、ならびに関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

（大阪公立大学 市田 珠奈）

## ICCCI 2025 報告

## Report of ICCCI 2025

飯村 健次\*  
Kenji Iimura

第8回となる材料界面の評価と制御に関する国際会議 (International Conference on the Characterization and Control of Interfaces for High-quality Advanced Materials) が2025年7月8～11日にかけて、山梨県富士吉田市所在のハイランドリゾートホテル & スパにて開催された。本会議は第60回となる粉体工学会夏期シンポジウムを兼ねて開催されており、1つのセッションが夏期シンポジウムのセッションとして設定されていた。霊峰富士を望む風光明媚な土地での開催とあり国内外から多数の参加があった。特に、先立って開催された the 10<sup>th</sup> International Conference on Discrete Element Methods (DEM10) から程ない開催であることもあり、引き続いての参加者も多くおられたことも特色として挙げられるであろう。この影響もあり、いつもにも増して国際色豊かでリサーチフィールドも多岐に渡る会は盛会となった (写真1)。会期中は場所柄もあり、本年の猛暑から考えると多少過ごし易い気候となっていたが、その分曇りがちの天気で開催1日目の朝を除いては富士山を大パノラマで一望する機会には恵まれなかったことは残念でならない。特に10日に開催されたエクスカージョンは富士山の5合目までのバスツアーであったが、一面の霧に包まれていたようだ。海外からの参加者にとっては楽しみが少し減ってしまった感はあるが、是非次回も“リベンジ”を果たすべくご参加頂きたいものである。

会議参加者の内訳は国内研究者150名を含む270名、22か国となっている。口頭発表は66件の招待講演を含む185件、ポスター発表78件であった。また、企業紹介・展示として開催されたIndustrial SessionにはNPO1団体、学協会2団体、財団1団体を含む19の企業・団体等から展示を頂いた。この場を借りて謝意を表す。

学術セッションは6つで構成されており、セッションAは夏期シンポジウムを兼ねており持続可能社会へ向け

た界面科学ならびに粉体技術、Bは先進材料のための粉体合成、Cは環境・エネルギー、Dは材料設計と評価、Eは先進モデリングとシミュレーションFはグローバル若手研究者フォーラムとなっている。各会場とも多くの参加者で賑わい、活発な議論が交わされていたことが印象的であった (写真2)。

また今回の会議では、学生交流会が初の試みとして開催され、66名4か国からの参加があった。筆者はおじさんなので参加できなかったが、大変な盛り上がりを見せていたと伝え聞いている。今後同様の取り組みを続け、



写真1 ウェルカムレセプションの風景



写真2 会議の風景

2025年9月2日  
兵庫県立大学大学院工学研究科 化学工学専攻  
(〒671-2201 兵庫県姫路市書写 2167)  
Department of Chemical Engineering, Graduate School of Engineering,  
University of Hyogo  
(2167 Shosha, Himeji, Hyogo 670-2201, Japan)

\* 連絡先 iimura@eng.u-hyogo.ac.jp

より多くの国からの参加を募り、より国際色豊かになってゆくことを心より望む次第である。今回の会議では、学生のポスター発表に対する授賞が大幅に拡充されていることも特徴として挙げられる。学生・若手研究者諸氏に対して22件のポスター賞が授与されており、学生・若手研究者をエンカレッジしようとする大会事務局の現れといえるであろう。以下、各参加者からの印象記を紹介するが、“生の声”を是非お聞き頂きたい。

最後に、本会議の運営にご尽力頂いた横浜国立大学の多々見純一先生、飯島志行先生に心より感謝を申し上げます。また、夏期シンポジウムを担当頂いた粉体グリーンプロセス研究会の代表である兵庫県立大学・佐藤根大士先生、大阪公立大学・野村俊之先生、横浜国立大学・多々見純一先生にはオーガナイザーとして運営に携わって頂き、成功裏に本会議を終えることができた。併せて感謝を申し上げます。今後ICCCIが益々の発展することを願う。

## シンポジウム印象記 Symposium Impression

### ICCCI2025 および第 60 回夏期シンポジウム印象記

#### Impressions on ICCCI2025 and the 60<sup>th</sup> Summer Symposium on Powder Technology

##### ICCCI2025 および第 60 回夏期シンポジウム印象記

2025 年 7 月 8 日から 11 日の 4 日間にわたり、山梨県富士吉田市のハイランドリゾートホテルにて、ICCCI2025 および第 60 回粉体工学会夏期シンポジウムが開催されました。会場は富士山麓の高地に位置しており、都心に比べて涼しく、快適な気候のもとで過ごすことができました。3 日目には急な雷雨に見舞われる場面もありましたが、山間部ならではの趣深さを感じる一幕となりました。

開催期間中には多くのご講演があり、とりわけセラミックスや粉体技術の多様な応用に関する内容に関心を持って聴講しました。セラミックスの加熱プロセスにおけるガス発生や構造解析、スラリーのシミュレーションの発表は、私が取り組んでいるリチウムイオン電池のリサイクルに関する研究にも関連があり興味深いものでした。また、学術的な話題にとどまらず、産業や芸術といった分野における粉体技術の応用を紹介する展示もあり、大変興味深く拝見しました。

2 日目にはポスターセッションが開催され、計 78 件の発表が行われました。コアタイムの序盤には、英語での発表に不慣れなこともあり、緊張感が漂っているように感じましたが、次第に多くの聴講者と活発な議論が交わされ、会場は文字通り熱気に包まれていました。私自身も発表の機会をいただき、ディスカッションを通じて多くの気づきや知見を得ることができました。また、「Young Research Award」を受賞することができ、大変光栄に存じます。

3 日目の夜には、学生限定の懇親会も開催されました。各テーブルでは海外学生と日本人学生が、研究の話題から趣味や進路といった幅広いテーマについて語り合い、学生同士ならではの活気ある交流が生まれていました。横浜国立大学の学生の皆様が企画してくださった催しも行われ、日本に馴染みのある景品や日本発祥のカードゲームを通じて、国籍を越えた親睦を深めることができました。

最後に、本会議の開催および運営に多大なご尽力をいただきました大阪大学の内藤先生、横浜国立大学の多々見先生、および関係者の皆様方に心より御礼申し上げます。普段なかなかお話しする機会のない先生方や他大学の学生の方との貴重な交流・ディスカッションを通じて、大変有意義な経験となりました。

(早稲田大学 栗原 嵩寿)

##### ICCCI2025 シンポジウム印象記

2025 年 7 月 8 日から 11 日にかけて山梨県富士吉田市のハイランドリゾートホテル&スパにて ICCCI2025 が開催されました。本会議は 3 年に一度開催され、今回で 8 回目となります。今回の会議でも日本のみならず海外から多数の方々が参加され、100 件以上の口頭発表と 70 件以上のポスター発表が行われました。

4 日間の会期中、多くの方々のご講演を拝聴する機会がありました。各会場で最先端な研究が発表されていく中でも特に、機械学習を用いた材料合成やその特性評価に関する発表は、昨今の急速な AI ブームを反映しており、次世代の研究手法の礎を予感させるような内容でした。

2 日目にはポスターセッションも開催され、多くの学生が参加し、研究内容の議論を交わしながら、知見を深めることができました。私自身も研究成果を発表し、多くの方々に関心を持っていただき、質疑応答を通じて貴重なご意見やご感想を頂戴しました。私事で恐縮ですが「Young Researcher Award」を受賞することができ大変光栄でした。本会で得られた知見は、今後の研究の方向性を定め、より一層発展させるための重要な糧となりました。夕食では学生交流会が開催され、ビンゴやレクリエーションを通じて外国の学生との親睦を深めることができました。

3 日目には富士山 5 合目と富士山ミュージアムを参加者の皆様方と訪問しました。特に海外の方は富士山の雄大で豊かな自然を非常に楽しんでいらっしゃった印象を受けました。富士山ミュージアムでは富士山の成り立ちやそこで行われているお祭りや神事などが紹介され、外国人のみならず日本人を含めた多くの方に楽しめるよう工夫されたプログラムであったと思います。

今回の ICCCI2025 では、自分の研究を進める上で非常に良い刺激となりました。また運営スタッフの一員として英語を用いた対応や学生交流会をはじめとした外国の学生とのコミュニケーションから自分の英語の未熟さを痛感したとともに、多くの国の文化や考え方を知ることができたのは本会議ならではの経験でした。

最後に、本国際会議の開催にあたり、大阪大学の内藤先生、横浜国立大学の多々見先生、オーガナイザーの先生方および事務局スタッフ、ホテル関係者の皆様に対し心より厚く御礼申し上げます。

(横浜国立大学 富山 亮太)

## ICCCI2025 および第 60 回夏期シンポジウム印象記

2025 年 7 月 8 日から 11 日にハイランドリゾートホテル & スパにて ICCCI2025 および第 60 回粉体工学会夏期シンポジウムが合わせて開催された。私にとって国際会議への参加は初めてであったが、日本開催でありながら海外からも多数の研究者が参加しており、国際色豊かな雰囲気に大いに刺激を受けた。会場では複数のセッションが同時に進行し、活発な議論や意見交換が絶えず行われていた点も印象的であった。

本国際会議は材料界面の評価と制御を主なテーマとしているものの、発表のトピックは多岐にわたっていて、聴講したいずれの発表も大変興味深いものであった。私自身も研究成果をポスターで発表する機会をいただき、質疑応答を通じて貴重なご意見やご感想をいただくことができた。これらの知見は、今後の研究を進めるうえで大きな糧になると感じている。

本国際会議で特に印象に残ったのは International Student Session である。このセッションでは、日本の学生と海外の学生が夕食やゲームを通じて交流を深めた。年齢の近い海外の方々と直接交流する機会はこれまで少

なく、研究に関する話題はほどほどに、日常生活や研究活動の違いについて語り合うことができ、大変有意義であった。夕食の席では研究室の雰囲気や学生生活のスタイルの多様性を知ることができ、新鮮な気づきを得られた。また、ゲームを通じて自然と打ち解けることができ、その後の会期中も交流を続けられたことは大きな収穫であった。

さらに 3 日目には、富士山五合目と富士山ミュージアムに参加者の皆様と訪問した。あいにくの天候のため山頂を望むことはできなかったものの、東の間の晴れ間に五合目から眺めた景色は格別で印象的であった。また、富士山ミュージアムのプロジェクションマッピングを用いた立体模型は迫力があり、特に海外からの参加者にとって強く印象に残したように思う。このような企画が研究交流に加えて文化体験の側面を持ち、国際会議の魅力を一層高めていると感じた。

最後になりますが、本国際会議の開催および運営にご尽力された先生方ならびに関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

(京都大学 森脇 真人)

## 粉砕の高度利用研究会 2023 ～ 2024 年度活動報告

## Activity Report of Research Group on Advanced Grinding Operations and Processes, 2023–2024

粉砕は、電子部品、医薬品、化粧品など多くのものづくりの分野で重要な役割を果たしている一方、今なお、“より微細化したい”、“粒子径分布を制御したい”、“高効率化したい”、“粒子形状を制御したい”、など多くの課題を抱えている。

粉砕の高度利用研究会では、研究会の活動を通して、人、研究、技術の交流を図り、課題の解決のみならず、粉砕の高度な発展へつなげ、日本の魅力あるものづくりに貢献していきたいと考えている。

以下は 2023 ～ 2024 年の活動である。2023 年は主催研究会 5 回、共催 2 回、2024 年にも主催研究会 5 回、共催 2 回の研究会を開催した。概要は以下の通り。

**◆ 2023 年度 第 1 回粉砕の高度利用研究会  
(第 9 回機能性粉体プロセス研究会)**

日 時：2023 年 1 月 23 日 (月)

場 所：東北大学多元物質科学研究所 西 2 号館

主 催：一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会

共 催：一般社団法人粉体工学会東北談話会  
公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会

一般社団法人粉体工学会粉体材料設計研究会

内 容：

「粉砕を理解・予測するためのシミュレーション」

東北大学多元物質科学研究所 教授 加納 純也

「粉体プロセスと材料開発」

大阪大学接合科学研究所 教授 内藤 牧男

**◆ 2023 年度 第 2 回粉砕の高度利用研究会  
(第 10 回機能性粉体プロセス研究会)**

日 時：2023 年 4 月 19 日 (火)

場 所：東北大学多元物質科学研究所 西 2 号館

主 催：一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会

共 催：一般社団法人粉体工学会東北談話会  
公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会

内 容：

「粉の魅力を引き出す粉体技術—つくる、しらべる、つかう—」

岐阜大学工学部／東北大学多元物質科学研究所  
准教授 高井 千加

「湿式ボールミルにおけるシミュレーションの活用」

東北大学多元物質科学研究所 助教 久志本 築

**◆ 2023 年度 第 3 回粉砕の高度利用研究会  
(第 11 回機能性粉体プロセス研究会)**

日 時：2023 年 6 月 20 日 (火)

場 所：東北大学多元物質科学研究所 西 2 号館

主 催：一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会

共 催：一般社団法人粉体工学会東北談話会  
公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会

内 容：

「パルス NMR による粒子界面評価と最適な分散条件の決定法」

マジェリカ・ジャパン株式会社 代表取締役／

東北大学多元物質科学研究所 客員准教授 池田 純子

「粉体の数値シミュレーションとデータ科学」

東北大学多元物質科学研究所 助教 石原 真吾

**◆ 2023 年度 第 4 回粉砕の高度利用研究会  
(第 12 回機能性粉体プロセス研究会)**

日 時：2023 年 8 月 24 日 (木)

場 所：東北大学多元物質科学研究所 西 2 号館

主 催：一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会

共 催：一般社団法人粉体工学会東北談話会  
公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会

一般社団法人粉体工学会粉体グリーンプロセス  
研究会

内 容：

「粉砕の基礎」

東北大学多元物質科学研究所 教授 加納 純也

「固液分散系プロセス最適化へ向けた分散状態制御」

兵庫県立大学 准教授 佐藤根 大士

**◆ 2023 年度 第 5 回粉砕の高度利用研究会  
(第 13 回機能性粉体プロセス研究会)**

日 時：2023 年 10 月 27 日 (金)

場 所：東北大学多元物質科学研究所 西 2 号館

主 催：一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会

共 催：一般社団法人粉体工学会東北談話会  
一般社団法人粉体工学会粉体グリーンプロセス  
研究会

公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会

内 容：

「高周波磁性受動素子への応用に向けた高磁束密度軟磁性金属粉体の開発」

九州工業大学 准教授 本塚 智

◆ 2023 年度 第 6 回粉砕の高度利用研究会  
(第 1 回粉体グリーンプロセス研究会)

日 時：2023 年 11 月 6 日 (月)

場 所：じばさんびる 602 会議室 (兵庫県姫路市)

主 催：一般社団法人粉体工学会粉体グリーンプロセス研究会

共 催：一般社団法人粉体粉末冶金協会粉体基礎分科会  
一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会  
公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会

内 容：

「気相中での微粒子のナノ構造化と機能」

広島大学大学院先進理工系科学研究科 教授 萩 崇  
「ろうそく燃焼から得られる機能性材料としてのすす  
微粒子の可能性を探る」

東京農工大学大学院工学府 教授 Wuled Lenggoro

◆ 2023 年度 第 7 回粉砕の高度利用研究会  
(第 2 回粉体グリーンプロセス研究会)

日 時：2023 年 12 月 27 日 (水)

場 所：兵庫県立大学姫路工学キャンパス C 棟 5 階 (兵庫県姫路市)

主 催：一般社団法人粉体工学会粉体グリーンプロセス研究会

共 催：一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会  
公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会

内 容：

「粉体工学的アプローチによる高耐食鋼板の開発研究」  
島根大学大学院自然科学研究科 教授 田中 秀和

◆ 2024 年度 第 1 回粉砕の高度利用研究会  
(第 14 回機能性粉体プロセス研究会)

日 時：2024 年 1 月 25 日 (木)

場 所：東北大学多元物質科学研究所 西 2 号館

主 催：一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会

共 催：一般社団法人粉体工学会東北談話会  
一般社団法人粉体工学会粉体グリーンプロセス研究会  
公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会  
一般社団法人資源・素材学会東北支部

内 容：

「濃厚スラリー中の粒子沈降現象」

兵庫県立大学 准教授 佐藤根 大士

「溶液プロセスを基軸とした粉体合成と光応答機能の  
開拓」 東北大学多元物質科学研究所 教授 殷 澍

◆ 2024 年度 第 2 回粉砕の高度利用研究会  
(第 1 回粉体グリーンプロセス研究会)

日 時：2024 年 5 月 29 日 (木)

場 所：兵庫県立大学姫路工学キャンパス C 棟 5 階 (兵庫県姫路市)

主 催：一般社団法人粉体工学会粉体グリーンプロセス研究会

共 催：一般社団法人粉体粉末冶金協会粉体基礎分科会  
一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会  
公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会

内 容：

「両親媒性分子の自己組織化と形態制御による機能性  
膜材料の開発」

兵庫県立大学大学院工学研究科 助教 田口 翔悟

「ナノバブル関連研究の進捗」

兵庫県立大学大学院工学研究科 准教授 飯村 健次

「次世代農業パイオニアに駆動される北海道伊達市での  
共成長」

室蘭工業大学大学院工学研究科 教授 山中 真也

◆ 2024 年度 第 3 回粉砕の高度利用研究会  
(第 15 回機能性粉体プロセス研究会)

日 時：2024 年 7 月 10 日 (水)

場 所：東北大学多元物質科学研究所 西 2 号館

主 催：一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会  
一般社団法人粉体工学会東北談話会

共 催：一般社団法人粉体工学会粉体グリーンプロセス研究会  
公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会  
一般社団法人資源・素材学会東北支部

内 容：

「シミュレーションによるピーズミルの性能評価手法」  
アシザワ・ファインテック株式会社 塩入 一希

◆ 2024 年度 第 4 回粉砕の高度利用研究会  
(第 16 回機能性粉体プロセス研究会)

日 時：2024 年 10 月 2 日 (水)

場 所：東北大学多元物質科学研究所 西 2 号館

主 催：一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会  
一般社団法人粉体工学会東北談話会

共 催：東北大学多元物質科学研究所  
一般社団法人粉体工学会粉体グリーンプロセス研究会  
公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会  
一般社団法人資源・素材学会東北支部

内 容：

「壁面衝突粒子の崩壊挙動の直接観察と解析」

兵庫県立大学 准教授 佐藤根 大士

「見えないことで未来を拓く」

アシザワ・ファインテック株式会社／  
東北大学多元物質科学研究所 助教 宮下 紘

◆ 2024 年度 第 5 回粉砕の高度利用研究会  
(第 17 回機能性粉体プロセス研究会)

日 時：2024 年 10 月 28 日 (月)

場 所：東北大学多元物質科学研究所 西 2 号館

主 催：一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会  
一般社団法人粉体工学会東北談話会

共 催：東北大学多元物質科学研究所  
一般社団法人粉体工学会粉体グリーンプロセス  
研究会  
公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会  
一般社団法人資源・素材学会東北支部

内 容：

「ナノ粉体プロセスの高度化に向けたシミュレーシ  
ョン手法の開発および応用」

東北大学多元物質科学研究所 助教 久志本 築  
「粉砕技術の最近の動向と今後の展開」  
大阪大学 名誉教授 内藤 牧男

◆ 2024 年度 第 6 回粉砕の高度利用研究会  
(第 2 回粉体グリーンプロセス研究会)

日 時：2024 年 10 月 28 日 (月)

場 所：兵庫県立大学姫路工学キャンパス C 棟 5 階

主 催：一般社団法人粉体工学会粉体グリーンプロセス  
研究会

共 催：一般社団法人粉体粉末冶金協会粉体基礎分科会  
一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会  
公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会

内 容：

「パルス NMR (TD-NMR) による粉体の濡れ性および  
分散評価～基礎原理から測定や試料準備のポイント～」

マジェリカ・ジャパン株式会社 代表取締役／  
東北大学多元物質科学研究所 客員准教授 池田 純子  
「粉の魅力を引き出す評価技術～時間領域核磁気共鳴  
(TD-NMR) を用いて粉の表面を知る！～」

岐阜大学工学部 化学・生命工学科／  
東北大学多元物質科学研究所 准教授 高井 千加

◆ 2024 年度 第 7 回粉砕の高度利用研究会  
(第 18 回機能性粉体プロセス研究会)

日 時：2024 年 12 月 23 日 (月)

場 所：秋田大学手形キャンパス一般教育 1 号館

主 催：一般社団法人粉体工学会東北談話会  
一般社団法人粉体工学会粉砕の高度利用研究会

共 催：一般社団法人粉体工学会粉体グリーンプロセス  
研究会  
公益社団法人化学工学会粒子・流体プロセス部  
会粉体プロセス分科会  
一般社団法人資源・素材学会東北支部

内 容：

「浮遊選鉱法を活用した廃棄物の資源化」  
秋田大学 准教授 芳賀 一寿

「貴金属塩化物錯体分布の実態」  
東北大学多元物質科学研究所 准教授 打越 雅仁  
「湿式ボールミル内砕料粒子挙動のシミュレーション  
を用いた解析」

東北大学多元物質科学研究所 助教 久志本 築  
「ビーズミルによる微粉砕・分散技術」

アシザワ・ファインテック株式会社  
微粒子技術研究所 主任研究員 石井 利博

(粉砕の高度利用研究会 代表 加納 純也  
東北大学多元物質科学研究所)



## ウィナーソーセージ

ウィーンに行ってみたら「ウィナーソーセージ」が見付けられなかった話。結論をいえばつまりソーセージにわざわざ「ウィーン風」と名付ける必要などないということなのであろう。「広島風お好み焼き」を彷彿とさせる事態ではある。しかもどうやらウィーン風ソーセージはウィーン現地では「Frankfurter」と呼ばれているのだそう…。その歴史的事情も興味深いがここでは他に譲る。日本におけるソーセージの分類はJAS（日本農林規格）に規定されている。これに拠ると、羊の腸をケーシングとする腸詰めをウィナーソーセージ、豚の腸を用いるものをフランクフルトソーセージ、牛の腸を用いるものをポロニアソーセージと呼ぶらしい。最近では動物の腸を用いずにコラーゲンなどで作られる人工ケーシングも広く実用化されており、従って動物の腸の種類に基づく定義に加えて、直径20mm未満がウィナーソーセージ、20mm以上36mm未満がフランクフルトソーセージ、36mm以上がポロニアソーセージと規定されている。つまり単に太さで分類されているのであった。なおJASには他にも様々な名称及び品質規定が記載されている。ドイツ人に聞くと当然のことながらこれら定義や名付けがまたまた全く違うのである。実際、「このフランクフルトって書いてあるのがウィナーソーセージなの？」という頓馬な質問をした相手がドイツ人であったばかりにその後長い講釈を受けるハメになったのであった。

(BB)

四分法

## ウィーンのカロワッサン

ウィーンに行ってみたら三日月型のカロワッサンを見付けられなかった話。筆者による極めて限られた範囲での探索の結果ではあるが、カロワッサンはみな真っ直ぐというか菱形とも呼ぶべきか、であって、ともかく三日月型のカロワッサンを見付けることができなかった。カロワッサンはマリーアントワネットがブルボン朝に興入れする際にパリにもたらしたという俗説があるが、バターを大量に使う現在の形に「進化」したのはその後そのパリに於いて、ということであるらしい。マリーアントワネットが持ち込んだのはあくまでその「原型」であって、Kipfelと呼ばれるパンであったとされ、現存する。上手に表現できないが、少し密度の高いロールパンのようなもので、しかも三日月型というよりはU字型をしていた。10cm×10cmの枠に収まるか収まらないかくらいのサイズ。少し甘かったが、ブリオッシュほどには柔らかくもなければリッチでもない。1683年のオスマン帝国による第二次ウィーン包囲戦に対する戦勝を記念してトルコの国旗のアイコンである三日月を「喰ってやる」ということで発明されたとされる。しかしそれもまた俗説であるとのことで、もう俗説が多過ぎる。croissantもkipfelもそれぞれ仏語と独語で三日月という意味である。しつこくネットで検索していたら、フランスでは、真っ直ぐなカロワッサンはバターを、三日月型のはマーガリンを使っているという情報もあった。もうなにを信じて良いのか判らない。

(BB)

四分法

## ウィナーコーヒー

ウィーンに行ってみたら「ウィナーコーヒー」という品目は存在していなかった話。ウィーンにコーヒーがもたらされたのはオスマン帝国メフメト4世による第二次ウィーン包囲の際であるという俗説は否定されているようであるが、ともあれウィーンのカフェ文化は花開いて今やユネスコ無形文化財である。メニューにはコーヒーバリエーションがずらりと並んでその数は20に及ぶのではないかというイキオイなのであった。コーヒーにホイップクリームを載せる、日本で「ウィナーコーヒー」と呼ばれているスタイルは、Einspännerという名称で、しかもガラス製でやや細長いカップで供されるのが標準である。他にも似た様なものがあって区別が良く判らない。コーヒーが浅煎りか深煎りか、コーヒーの量とクリームの量の比率、などにどうやら細々とバリエーションがあってそれぞれ異なる名称であるらしい。現地での最も標準的な飲み方は「Melange」と呼ぶ、コーヒーにフォームドミルクを載せたもの。つまりホイップクリームではない。フォームドミルクを載せるのであればカプチーノと同じものであろうかと一瞬思うが、メニューの中にはカプチーノもあって両者並び立つのである。きっと素人には検知できない何か異なるのであろう。ウィーンコーヒー文化は部外者には遠き高みなのである。かのエンプレス、マリアテレジアの名を冠したコーヒーは、「エスプレッソ+コアントロー+ホイップクリーム+チョコスプレー」というものであった。

(BB)

四分法

## ウィナーシュニッツェル

ウィーンでウィナーシュニッツェルを見つけた話。遂に辿り着きましたよ。ウィーンで「ウィーン風○○」に。寧ろメニューには「真のウィナーシュニッツェル」みたいなことが書いてあったほどである。これはどうやら、「ウィナーシュニッツェル」と称するからには必ず仔牛肉を用いなければならない、という決まりがあることによるようである。その他、材料には豚・鶏・七面鳥などのバリエーションがあり得るが、仔牛肉以外の場合には当該材料をメニューに明記しなければならないことになっているらしい。ドイツ語の「Schnitzel」の元の意味は「薄切り肉」であるところ、今では料理名としてのみ用いられているようである。薄切り肉を更に肉ハンマーでぶったいて薄くする。これによって繊維を破壊して柔らかくする。というのがレシピの基本構造なのであろうと理解される。それにパン粉を付けて揚げ焼きにする。日本のトンカツのように油にどぶ浸けするわけではなくあくまで揚げ焼き。パン粉は日本のパン粉とは少し違って乾パンの類の粉碎品で粒度はとて細かい。逆に最近、欧米では日本的な粗いパン粉が「PANKO」として膾炙しつつあると聞くところである。料理の原型は北イタリアからウィーンにもたらされたとされるので、「ミラノ風カツレツ」の系譜ということになるのか。かのヨハンシュトラウス「ラデツキー行進曲」のラデツキー将軍がミラノ戦線からレシピを持ち帰ったとされるがこれもまた俗説に過ぎないらしい。

(BB)

四分法



一般社団法人 日本粉体工業技術協会 本部：〒600-8176 京都市下京区烏丸通り六条上ル北町 181 番地 第5キョートビル7階  
 TEL 075-354-3581 FAX 075-352-8530  
 一般社団法人 日本粉体工業技術協会 東京事務所：〒113-0033 東京都文京区本郷 2-26-11 種苗会館5階  
 TEL 03-3815-3955 FAX 03-3815-3126

### ◆ 協会行事日程のご案内

最新情報は協会サイトからご確認ください。  
 行事の詳細は京都・協会本部または東京事務所にお問合せ下さい。

行事名	月日	場所	備考
粉体技術者養成講座 混合	10月3日(金)	神奈川／(株)徳寿工作所	9:00～16:30 17:00～19:00 交流会
POWTEX®2025	10月15日(水)～17日(金)	大阪／インテックス大阪	
粉体技術者養成講座 乾燥	10月30日(木)～31日(金)	静岡／(株)大川原製作所 技術センター	1日目 11:00～17:10 17:40～19:40 交流会 2日目 9:00～16:15
第4回標準化セミナー	11月4日(火)	名古屋／ウインクあいち (愛知県産業労働センター)	13:00～17:30 18:00～19:30 意見交換会
粉体技術者養成講座 粒子加工	11月6日(木)～7日(金)	兵庫／(株)パウレック	1日目 13:00～17:00 17:30～19:30 交流会 2日目 9:00～16:10
粉体技術者養成講座 粉砕	11月12日(水)～13日(木)	東京／ヴァーダー・サイエ ンティフィック(株)	1日目 10:00～17:25 18:15～20:15 交流会 (予定) 2日目 9:00～16:45
粉体技術者養成講座 集じん	12月15日(月)～16日(火)(予定)	名古屋／ウインクあいち (予定)	
粉体技術者養成講座 ろ過	2026年2月4日(水)～5日(木)	大阪／関西金網(株)	
第73回粉体技術専門講座 【混合・成形分科会】	2～3月頃	未定	

### ◆ 分科会の開催案内

会員の方ならどなたでも参加できます。非会員の方でも参加できますので、参加を希望される場合は、各分科会の申込み先あるいは協会本部までお問合せください。分科会の活動状況と詳しい開催案内は協会ホームページでご確認ください。

行事名	月日	時間	場所
第2回粒子加工技術分科会	10月2日(木)	13:00～17:00	WEB 見学講演会
第2回環境エネルギー・流動化分科会	10月15日(水)	見学・講演会 12:40～16:00 懇親会 16:45～19:00	奈良／やまと eco クリーンセンタ
第2回混合・成形分科会 POWTEX®2025「粉体機器ガイダンス 混合・成形」	10月16日(木)	10:30～12:30	大阪／インテックス大阪
第2回集じん分科会 POWTEX®2025「粉体機器ガイダンス 集じん」	10月17日(金)	13:00～14:50	大阪／インテックス大阪
第3回集じん分科会 (第4回標準化セミナー共催)	11月4日(火)	13:00～17:30	名古屋／ウインクあいち
第2回クリーン化分科会	11月6日(木)	13:30～17:00	茨城／日本バイリーン(株)東京工場

第2回乾燥分科会	11月10日(月) ～11日(火)	13:00～12:00	日本大学 理工学部 駿河台校舎
第2回食品粉体技術分科会	11月13日(木)	講演会 13:00～17:00 懇親会 17:30頃～調整中	山梨／横河マニュファクチャリング (株) 甲府事業所
合同分科会(第2回粉体ハンドリング & 第3回計装測定)	12月2日(火)	講演会 10:00～17:10 懇親会 17:30～19:30	東京／同志社大学東京オフィス
第1回分級ふるい分け分科会	12月3日(水)	講演会 :13:30～17:15	愛知／(国研)産業技術総合研究所 中部センター

#### 分科会開催案内



[https://appie.or.jp/introduction/organization/technical\\_groups/](https://appie.or.jp/introduction/organization/technical_groups/)

#### ◆粉体関連総合情報誌「粉体技術」

日本粉体工業技術協会が発行する月刊「粉体技術」は、粉体に関わるあらゆる技術、粉体領域に関する最新情報、マーケティング・マネージメントおよび海外情報など幅広い内容を網羅した粉体関連産業に携わる方々への総合情報誌です。一般の書店などでは容易に入手できませんので、ぜひ予約購読をお願い致します。

【最新号】2025年10月号「飛ばせたい粒子」



<https://appie.or.jp/shirumanabu/publishing/funtaigijyutu/>

## 粉体工学会 行事予定

## ☆ 主催行事

開催期日	行 事	会 場	掲載巻・号
2025年			
10月14日(火) } 15日(水)	2025年度秋期研究発表会【参加募集】	インテックス大阪(大阪)	62巻9号
10月30日(木) } 31日(金)	第42回製剤と粒子設計シンポジウム 【参加募集・プログラム】	朱鷺メッセ(新潟)	62巻9号
11月10日(月) } 11日(火)	粉体の機械的単位操作に関する参加型講演会(第11回)	日本大学(東京)	62巻9号
11月14日(金)	2025年度第2回省エネルギーに貢献する 粒子設計・粉体プロセスの薬工連携研究会	貸し会議室イールーム 名古屋駅前(愛知)	本号

## ☆ 特別協賛行事

開催期日	行 事	会 場	問合せ先	TEL (FAX) E-mail URL
2025年				
10月15日(水) } 17日(金)	POWTEX2025(第26回国際 粉体工業展大阪)	インテックス大阪 (大阪)		<a href="https://www.powtex.com/osaka/">https://www.powtex.com/osaka/</a>

## ☆ 共催, 協賛, 後援行事

開催期日	行 事	会 場	問合せ先	TEL (FAX) E-mail URL
2025年				
8月1日(金) } 2026年 2月28日(土)	粒子・流体プロセス技術 コース2025(第39回流動 層技術コース)	群馬大学(群馬)他	粒子・流体プロ セス技術コース 事務局	0277-30-1456 yhayashi@gunma-u.ac.jp <a href="https://sites.google.com/site/atwfbtc/">https://sites.google.com/site/atwfbtc/</a>
10月2日(木)	2025年度第3回見学・講 演会	オンライン開催	製剤と粒子設計 部会	<a href="https://eventregist.com/e/9tSEDEy8JRo1">https://eventregist.com/e/9tSEDEy8JRo1</a>
10月2日(木) } 3日(金)	全固体電池 国際シンポジウム	(10/2)大阪公立大学 I-site なんば(大阪) (10/3)中百舌鳥キャン パス(大阪) (ハイブリッド開催)	大阪公立大学研 究推進機構全固 体電池研究所	<a href="https://docs.google.com/forms/d/1kSoFsztFIVCX-YPINZK8N_nNkYEMsU_80QcuYpSOS5U/viewform?edit_requested=true">https://docs.google.com/forms/d/1kSoFsztFIVCX-YPINZK8N_nNkYEMsU_80QcuYpSOS5U/viewform?edit_requested=true</a>
10月6日(月) } 9日(木)	第11回材料WEEK	京都テルサ(京都)	日本材料学会	075-761-5321 jimu@office.jsms.jp <a href="https://www.jsms.jp">https://www.jsms.jp</a>
10月8日(水) } 9日(木)	第46回初心者のための疲 労設計講習会	京都テルサ(京都)	日本材料学会	075-761-5321 jimu@office.jsms.jp <a href="https://www.jsms.jp">https://www.jsms.jp</a>
10月8日(水) } 10日(金)	第46回日本熱物性シンポ ジウム	アバンセ(佐賀)	日本熱物性学会	03-5452-6218 jstp@iis.u-tokyo.ac.jp <a href="https://jstp-symp.org/symp2025/index.html">https://jstp-symp.org/symp2025/index.html</a>

10月10日(金)	第49回基礎化学工学演習講座(実験クール) 「濾過実験・データ解析とけーく特性の評価」	(株)三進製作所 本部・犬山工場技術研究所(愛知)	化学工学会東海支部	080-4525-3070 info@scej-tokai.org https://scej-tokai.org/5917/
10月15日(水)	粉末・多結晶のX線解析講習会～最新の研究事例から学ぶ実践的アプローチ～	大阪公立大学 I-site なんば(大阪)	日本結晶学会	06-6605-7040 kubotayoshiki@omu.ac.jp https://crsj.jp/news/2025/250804xrd.html
10月16日(木) 17日(金)	第44回農薬製剤・施用法シンポジウム	はまぎんホール ヴィアマール(神奈川)	日本農薬学会	080-8547-0920 yoshitaka.sato@bayer.com https://pssj.jp/committee/seizai/seizai44.html
11月1日(土) 30日(日)	第80回表面科学基礎講座「表面・界面分析の基礎と応用」	オンライン開催	日本表面真空学会	03-3812-0266 office@jvss.jp https://www.jvss.jp/ja/activities/04/detail/00025.html
11月4日(火)	第4回標準化セミナー「ろ布および乾式ろ過集じん装置の性能評価試験の標準化とその応用展開」	ウインクあいち(愛知県産業労働センター)(愛知)	日本粉体工業技術協会	t-fuse@appie.or.jp
12月1日(月)	2025年度 粉末冶金基礎講座	京都経済センター(京都)(ハイブリッド開催)	粉体粉末冶金協会	075-721-3650 info@jspm.or.jp https://www.jspm.or.jp/
12月2日(火)	2025年度 粉末冶金実用講座	京都経済センター(京都)(ハイブリッド開催)	粉体粉末冶金協会	075-721-3650 info@jspm.or.jp https://www.jspm.or.jp/
12月5日(金)	第20回若手シンポジウム～材料分野の仕事と研究の魅力～	同志社大学 今出川校地(京都)	日本材料学会関西支部	075-761-5324 kansai@office.jsms.jp https://www.jsms.jp/kaikoku/kansai20251205.htm
12月9日(火) 10日(水)	第34回微粒化シンポジウム	芝浦工業大学 豊洲キャンパス(東京)	日本エネルギー学会	03-3834-6456 takase_jie1921@jie.or.jp https://www.jie.or.jp/publics/index/1052/
12月16日(火) 17日(水)	第12回分散凝集科学技術講座 分散・凝集のすべて	オンライン開催	日本化学会コロイドおよび界面化学部会	jigyoukikaku_03@colloid.csj.jp https://colloid.csj.jp/202508/2025pt/
2026年				
2月25日(水)	PLCM研究会第19回シンポジウム	名城大学薬学部ライフサイエンスホール(愛知)	PLCM研究会	090-3932-3279 sunada@meijo-u.ac.jp
4月21日(火) 22日(水)	第43回空気清浄とコンタミネーションコントロール研究大会	早稲田大学国際会議場(東京)	日本空気清浄協会	03-3665-5591 jaca@jaca-1963.or.jp https://www.jaca-1963.or.jp/

## ▶ 会員 消息

### 会 員 数

2025年8月29日現在

維持会員	19 社
賛助会員	71 社
事業所会員	239 社
個人会員	371 名
学生会員	126 名
図書館会員	15 社
名誉会員	91 名
会員総数	932

## 訃 報

小石 真純 先生（東京理科大学名誉教授）  
8月24日 ご逝去  
誌上より謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



## 2025 年度粉体工学会研究奨励賞 候補者推薦のお願い

（一社）粉体工学会 表彰委員会  
論文賞等審査委員会  
審査委員長 飯村 健次

2025 年度粉体工学会研究奨励賞の候補者について、会員各位からご推薦頂きますようお願い申し上げます。  
選考基準等の詳細は下記リンク中の表彰規程をご参照ください。

<https://www.sptj.jp/assets/doc/outline/regulation/14.pdf>

1. 受賞対象者 2026年3月31日時点で35歳以下の研究者
2. 推薦期限 2025年12月31日（水）
3. 推薦方法 学会 HP からダウンロードした「推薦回答フォーム」を、事務局（E-mail: kaishi@sptj.jp）まで添付ファイルにてご送付下さい。  
学会 HP : <https://www.sptj.jp/award/>

### 粉体工学会研究奨励賞 表彰規程（抜粋）

- 1) 特に期待されると認められる若手の研究者（個人）に授与する。受賞対象者はその年齢が表彰対象年度の翌年度3月31日の時点で35才以下であり、粉体工学会の会員であることを条件とする。
- 2) 審査は和文誌に掲載された論文と研究ノート（但し2011年度までは寄書）、英文誌に掲載された Original Research Paper と Rapid Communication の内容、および粉体工学会への寄与等を判定材料とする。論文は共著のものであっても差し支えない。

## 2025年度 第2回 省エネルギーに貢献する 粒子設計・粉体プロセスの薬工連携研究会

主催 粉体工学会 省エネルギーに貢献する粒子設計・粉体プロセスの薬工連携研究会  
共催 粉体工学会 中部談話会, 名古屋工業大学先進セラミックス研究センター

本研究会では環境・省エネ・低コストをキーワードに、新しい粒子設計と粉体プロセスを薬工連携により提案し開発することを目指しています。薬学と工学の連携、産・学の連携により、既存枠を飛び越えた新たなシーズ・ニーズの発掘や研究の迅速化につながると思われます。今回は、下記3名の研究者にご講演いただき、専門分野の常識に囚われない分野横断的な議論を行える薬工連携の場を提供します。

日時：2025年11月14日（金）13:00～16:30

場所：貸し会議室イールーム 名古屋駅前A

URL：<https://www.instabase.jp/space/1863377431>

### プログラム：

- 13:00 開会の挨拶（名古屋工業大学・東北大学 高井千加）  
13:10 講演①「ソフトマターの変形を用いた流体の流動制御」  
（名古屋大学 大学院工学研究科 機械システム工学専攻 教授 日出間 るり 先生）  
14:10 休憩 10分  
14:20 講演②「ウミガメ・クジラに付くフジツボたちの生態と進化」  
（日本工営株式会社 中央研究所 先端研究センター 林亮太 先生）  
15:20 休憩 10分  
15:30 講演③ 「菌糸の知的な行動」  
（東北大学 大学院農学研究科 准教授 深澤 遊 先生）  
16:30 閉会の挨拶（岐阜薬科大学 田原 耕平）

終了後、交流会（詳細は当日お伝えします）

参加費：無料（粉体工学会の非会員でも聴講可能）、交流会参加者は別途お支払いをお願いします

参加申し込み締切：2025年10月30日（木）

参加申し込み方法：下記 E-mail へ①ご氏名、②所属先、③電話番号、④ E-mail、⑤交流会参加有無をご連絡ください。

問い合わせ先：高井 千加（名古屋工業大学・東北大学）

TEL: 0572-27-6811, E-mail: [takai.chika@nitech.ac.jp](mailto:takai.chika@nitech.ac.jp)

### 一般社団法人粉体工学会

## APT Outstanding International Contribution Award 2024 受賞者

粉体工学会 APT Outstanding International Contribution Award は、本会英文誌編集委員もしくは査読者（Reviewer）として英文誌の論文審査に関わり、その優れた審査実績により、顕著な貢献があったと認められたかた（個人）に贈られます

第8回 2024年

小澤 隆弘（大阪大学）

打越 哲郎（物質・材料研究機構）

岩崎 智宏（大阪公立大学）

丹野 賢二（電力中央研究所）

Xiangyang Xu（Central South University）

# 粉体工学会誌 投稿方法変更のお知らせ



このたび粉体工学会誌では、投稿者の利便性向上と編集業務の効率化を目的として、電子投稿システム Editorial Manager<sup>®</sup> (EM) を導入いたしました。これに伴い、従来の「和文誌編集委員会事務局へのメール添付による投稿」から、すべての投稿（依頼原稿の一部を除く）を EM 上で受け付ける方式へと変更いたします。

今後の投稿は、以下のサイトより EM での手続きが必須となります。

Editorial Manager<sup>®</sup>: <https://www.editorialmanager.com/jsptj/>

「投稿の手引き」は EM 導入にあわせて改訂いたしました。ご投稿前には粉体工学会誌の公式ウェブサイト (<https://www.sptj.jp/publication/kaishi/>) をご確認ください。

これまでの投稿方法に慣れておられる方には一部ご負担をおかけすることとなりますが、今後は EM を通じた投稿に統一いたします。本改訂により、会員の皆さまにとって一層円滑で透明性の高い投稿・審査環境が実現できるものと考えております。引き続き本誌の発展にご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

---

## 粉体工学会誌投稿の手引き

(一社) 粉体工学会 和文誌編集委員会 (2025 年 9 月改訂)

### 1. はじめに

粉体工学会誌は、粉体工学の学会誌として月刊で刊行されており、国内外から高い評価を得ています。粉体に関与する広い分野における研究成果の発表の場として、情報交換および研究交流の場として、本誌を今後ますます充実させ、会員の皆様のお役に立つようにしていきたいと考えています。会員の皆様からの価値ある論文、会員に役立つ記事など積極的なご投稿をお待ちしています。

### 2. 原稿の種別について

#### 2.1 論文

内容はいずれも投稿規定に示されたとおりです。工場現場や試験所の結果など、未発表のデータで、オリジナルなものも歓迎します。「研究論文」および「技術論文」は、誌上では区別することなく単に「論文」とします。「論文」としてはデータ等が量的に少ない研究成果でも内容に学術的または実用的価値がある短報は「研究ノート」とします。

#### 2.2 一般記事

##### 2.2.1 総説, 解説, 講義, 講座

総説は、粉体工学の基礎および応用に関してすでに発表された幾つかの研究成果や情報などに基づいて、執筆者の意見や将来への展望などをまじえて総合的に、会員に分かりやすく説明したものをいいます。解説は、すでに発表された研究成果、情報などについて分かりやすく説明したもの、また分かりやすくまとめ直したものです。また会員のための、講義、講座などを設けています。

##### 2.2.2 技術資料

技術資料は、工場現場などにおける経験や試験・調査結果または設計・操作上の資料、または既発表の論文を資料的に要約したものです。

##### 2.2.3 研究・技術情報 (海外報告, 寄稿など)

国内外の他学会における粉体に関する研究発表の状況、研究機関の紹介などで、会員に役立つ研究・技術に関する情報をいいます。

## 2.2.4 その他

四分法は、600字程度の気楽な記事で、なるべく粉体に関係ある内容を望みますが限定はしません。新しい言葉・古い言葉は、誌上に出てくる極めて専門的な用語を、専門外の人にも分かりやすく解説する欄としても役立てて下さい。これらの他に、巻頭言、学位論文紹介、シンポジウムなどの報告記、書評などがあります。

## 3. 執筆にあたって

3.1 執筆にあたっては以下の注意を守り、読者に分かりやすく書いて下さい。

3.1.1 本手引き最後の「原稿種別による書式一覧表」を参照の上、テンプレートに基づいて執筆して下さい。テンプレートは、本会のHP (<https://www.sptj.jp/>) からダウンロードして下さい。

3.1.2 題名は内容に即したものとし、第1報、第2報……等を用いず、それぞれ独立した論文として題名を付けて下さい。また、略号や化学式は使わず、化合物名などを書いて下さい。英文題名は、冠詞、前置詞、接続詞以外の頭文字は大文字で書いて下さい。論文、研究ノート、技術資料については、題名には副題を付けないよう、また題名に商品名を付けることは極力避け、学術的な用語で客観的に表現して下さい。

3.1.3 原稿本文は、テンプレートに準拠してA4判1ページに35字×24行12ポイントで、余白左右上下30mm設定、ページ番号を付して作成して下さい。本文中の図、表番号は、初出のみ太字で示して下さい。

3.1.4 文章は平易な口語体で、原則として常用漢字と現代かな使いにより、簡潔に書いて下さい。句読点は「,」「。」(いずれも全角)を用いて下さい。副詞、接続詞、助詞、助動詞、補助動詞は原則としてひらがなで表記して下さい。括弧は、和文中は全角、英文中は半角を用いて下さい。「粉体工学用語辞典」に準じ、辞典に載っている旧字は認め、載っていない旧字については、他学会で認められていても粉体工学会誌では原則として旧字を使用せず、ひらがな表記とします。読み方が難しい旧字には、ふりがなをつけて下さい。固有名詞(人名、地名、書名、誌名等)は和文に限定しませんが、それ以外は和文とします。また、一般原稿以外では商品名の使用は原則認めません。

辞典になく例外的に認めている旧字使用例：沈澱

かな追加例：混捏(こんねつ)、直捏(じかごね)、篩振盪(ふるいしんとう)

3.1.5 本文の区分けはポイント・システムによる見出しを用い、大見出し1., 2., …, 中見出し1.1, 1.2, …, 小見出し1.1.1, 1.1.2, …はそれぞれ太字に、それ以降は(1), (2), …, (A), (B), …などで区別して下さい。

3.2 単位は国際単位系(SI)を用いて下さい。

3.3 数式は次のように書いて下さい。

3.3.1 分数、微分、積分式は2行にまたがりその中間に書いて下さい。ただし、簡単なものは $a/b$ として下さい。

3.3.2 長い式を途中で切って2行以上にわたる場合は、次行の式の始めに $\times$ ,  $+$ ,  $-$ の記号をつけて下さい。

3.3.3 全ての式番号は各式の行の右端に(1), (2), …のように通し番号をつけて下さい。本文中ではEq. (1), Eqs. (1), (2)のように書いて下さい。

3.3.4 文章の中の式は必ず1行とし、分数を/で区切るときは、分母に2個以上の項があれば、それらを必ず( )でくくって下さい。例： $x/(x+1)$

3.4 量記号、単位記号および化学記号はJIS Z 8202に、数学記号はJIS Z 8201に準拠して下さい。要点を示すと次のとおりです。

- ・量記号は斜体 例： $m$  (質量),  $\rho$  (密度),  $p$  (圧力),  $\tau$  (せん断応力)
- ・無次元パラメーターおよび基本定数は斜体 例： $Re, Pe, Fr, Kn, k$  (ボルツマン定数),  $R$  (ガス定数)
- ・単位記号は直立体 例： $\text{Pa}, \text{N}/(\text{m}^2 \cdot \text{s}), \text{kg}/\text{m}^3, \text{rad} \cdot \text{s}^{-1}$
- ・記号に続く単位は括弧[ ]に入れ、数値に続く単位は括弧に入れないで下さい。  
例： $\tau [\text{N} \cdot \text{m}^{-2}], 1.013 \times 10^2 \text{ kPa}$
- ・化学記号は直立体 例： $\text{CO}_2, \text{C}_2\text{H}_4, \text{SiCl}_4$
- ・数値は直立体 例： $1, 3.14, 4.00 \times 10^3$
- ・数学記号で定数、演算記号は原則として直立体、変数記号は斜体  
例： $\exp, \lim, du/dt$  の  $d$  は直立体,  $u, t$  は斜体
- ・添え字(上付きまたは下付き)は、原則として直立体、変数記号の場合は斜体も可  
例： $d_p, x_i$
- ・ベクトルは斜体+太字 例： $\boldsymbol{v}, \boldsymbol{\sigma}, \boldsymbol{A}$
- ・リットルは大文字L 例： $\text{mL}$
- ・質量はwt, weightではなくmassを使用して下さい。

- 3.5 脚注は本文中に<sup>\*1)</sup>, <sup>\*2)</sup> などのように上付きにして区別し、用紙の下方に直線を入れてその下に書いて下さい。図表中の脚注は、パラメーターに関する脚注を優先し、次に数値等に番号を振って下さい。
- 3.6 図は見本を参考にして、以下の要領で作成して下さい。図は、著者原稿をそのまま縮小して印刷原稿としますので、印刷される大きさを考慮し、描線の太さや文字の大きさに留意下さい。
- 3.6.1 A4判1ページに1図とし、印刷される大きさの2倍程度で作成して下さい。
- 3.6.2 図中の英文字、数字はTimes New Roman フォント、日本語は明朝系フォントを用いて下さい。
- 3.6.3 図中に記入された実験条件、記号説明等は、図の縮小に応じて大きく書くか、別に図説名に続けて書き、小さくなり過ぎないようにご注意下さい。また、図中の装置の番号の説明等は、なるべく図中に入れずに図の下か、左右の空いた箇所に書き、これら説明、図説明等が英文の場合、初めの1字は大文字、他は小文字で書いて下さい。
- 3.6.4 図の下側に、図番号、簡潔な表題を必ず記入し、そのあと説明をつける場合は表題のあと改行して記載して下さい。一つの図番号で、複数の図を記載する場合は、図番号に対応した表題をつけた上で、各図に a), b), c) とし、それぞれ簡潔な表題を記載して下さい。
- 3.7 写真は図と同じ取扱いをしますので、書式(3.6)に準拠して下さい。
- 3.8 表は見本を参考にして、以下の要領で作成して下さい。
- 3.8.1 A4判1ページに1表とし、印刷される大きさの2倍程度で作成して下さい。
- 3.8.2 罫線は必要最小限にとどめて下さい。
- 3.8.3 表中の英文字、数字はTimes New Roman フォント、日本語は明朝系フォントを用いて下さい。
- 3.8.4 表の上に表番号、表題名を必ず記入して下さい。
- 3.9 図表の題名一覧を本文原稿最後に付して下さい。
- 3.10 本文中の説明を末尾に別記する Appendix は、文中では前後のつながりを中断したり、煩雑になるなど、やむを得ない場合のみに限って下さい。Appendix 中で使用する図、式番号は、別に独立して Fig. A-1, Eq. (A-2) のように書いて下さい。
- 3.11 原稿の種別ごとの刷り上がりページ数の目安、題名、要旨、図や式番号などの和・英の書き方は、本手引き最後の「原稿種別による書式一覧表」に従って書いて下さい。
- 3.12 刷り上がりページ数について
- 3.12.1 書式(3.1.3)による原稿は、約3ページで刷り上がり1ページになります(原稿文字約2500字で刷り上がり1ページ)。
- 3.12.2 論文、研究ノートなどでは刷り上がりページ数を超えた場合、超過料金がかかります。本手引き最後の別刷料金表を参照して下さい。
- 3.13 図・写真などのカラー印刷について
- 3.13.1 印刷媒体：基本はモノクロ印刷(無料)ですが、有料でカラー印刷も受け付けます。  
電子媒体：J-STAGEに掲載するPDFファイルも基本はモノクロ(無料)ですが、有料でカラー図への変更も受け付けます。カラー印刷およびカラーPDFファイル作製料金は、別刷料金表末尾に記載しています。
- 3.13.2 提出されたカラー図を、そのまま印刷媒体用に白黒印刷すると、画像の質が落ちることがありますので校正の際に必ず確認下さい。また、印刷媒体を白黒印刷とし、オンライン版をカラー印刷とする場合、本文の説明は、白黒とカラーの両方に合致する表現になるよう注意して下さい。
- 3.14 使用記号  
論文、研究ノート、総説、解説および技術資料などの場合、本文の後に英文で次の例のように使用記号を記して下さい。記号はアルファベット順に、また複数の同じアルファベット記号は、大文字、小文字の順に、まず英語の記号、その後にギリシャ語の記号を、上から下へ配列して下さい。Subscript や Superscript の説明も記入して下さい。一般記事の講座、講義では和文で末尾にまとめて記して下さい。

### Nomenclature

$C_p$	: constant in Eq. (3)	[m]
$G$	: Gibbs free energy	[J/mol]
$u$	: fluid velocity	[m/s]
$\varepsilon$	: porosity	[-]
$\mu$	: viscosity	[kg/(m·s)]

#### Subscript

ads	: adsorbent
s	: steam

3.15 引用文献は以下の要領で書いて下さい。

- 3.15.1 論文，研究ノート，総説，解説および技術資料などでは，以下の例（References）のように英語で作成して下さい。文献は題名も記入して下さい。題名はすべて英語です。英語表記の無い場合は，ローマ字表記にして下さい。
- 3.15.2 一般記事の講座，講義では，以下の例（引用文献）のように日本語で作成して下さい。
- 3.15.3 本文の引用順に番号を [ ] で入れて下さい。
- 3.15.4 連続して同一誌の引用では，*ibid.* を用いないで雑誌名を記載して下さい。共著者も，*et al.* を用いないで，全共著者名を列記して下さい。
- 3.15.5 雑誌名は ISO 4（Information and documentation – Rules for the abbreviation of title words and titles of publications）に準拠，もしくは発行元指定・推奨の省略形で記載して下さい。
- 3.15.6 web の引用は原則不可とします。

## References

### 雑誌

- [1] M. Horioe, R. Itoh, K. Gotoh, Uniform dispersion of fine particles in a magnetic fluid and its evaluation, *J. Soc. Powder Technol.*, Japan 31 (1994) 151–156.
- [2] T. Tanaka, A design procedure for various types of closed circuit grinding systems including plural mills and classifiers, *J. Soc. Powder Technol.*, Japan 31 (1994) 333–341.

### 会議録

- [3] H. Takase, K. Higashi, M. Sugimoto, Effect of coal slurry properties on deashing by oil agglomeration, *Proc. 2nd World Cong. Particle Technol.*, Kyoto (1990) pp.IV, 556–563.
- [4] T. Seto, K. Okuyama, A. Hirota, The morphology and electric property of aluminium-doped zinc oxide fine particles produced by CVD, *Preprint 31st Summer Symposium, Soc. of Powder Technol.*, Japan, Kannami (1995) pp.74–77.

### 単行本

- [5] K. Iinoya, *Syujin Kogaku*, Nikkan Kogyo (1980) p.96.  
アメリカの特許例
- [6] D.W. Smith, US6676358, 2004-01-13.  
ヨーロッパの特許例
- [7] Wisconsin Alumni Research Foundation, EP1670901, 2005-03-20.

### 日本の特許例

- [8] Japanese Unexamined Patent Application No.JP2012-26000, 2012-05-27.
- [9] Japanese Patent No.JP2014-250000B, 2014-03-17.

### WO（国際特許）例

- [10] WO 2009101973 A1, 2009-03-20.

### その他（印刷中の場合）

- [11] M. Yamada, Biomass combustion ash behavior, *Adv. Powder Technol.* in press.

## 引用文献

### 雑誌

- [1] 堀添昌則，伊藤隆造，後藤圭司，磁性流体中における微粒子の均一分散とその評価，*粉体工学会誌* 31 (1994) 151–156.
- [2] 田中達夫，複数の粉碎機または分級機を含む種々の形式の閉回路粉碎の設計法，*粉体工学会誌* 31 (1994) 333–341.

### 会議録

- [3] H. Takase, K. Higashi, M. Sugimoto, Effect of coal slurry properties on deashing by oil agglomeration, 第2回粉体工学世界会議論文集，京都 (1990) pp.IV, 556–563.
- [4] 瀬戸章文，奥山喜久夫，廣田敦史，CVD法により製造したアルミニウムをドーピングした酸化亜鉛粒子の形態および電気特性，*粉体工学会第31回夏期シンポジウム講演要旨集*，函南 (1995) pp.74–77.

### 単行本

- [5] 井伊谷鋼一，*集塵工学*，日刊工業 (1980) p.96.

日本の特許例

[6] 特開 2012-26000, 2012-05-27.

[7] 特許第 2014-2500000B 号, 2014-03-17.

その他 (印刷中の場合)

[8] M. Yamada, Biomass combustion ash behavior, Adv. Powder Technol. 印刷中.

#### 4. キーワードについて

- 4.1 キーワードを必要とする原稿種別 (「原稿種別による書式一覧表」を参照) では, 以下の要領でキーワードを作成し, アブストラクトの次に記載して下さい。
- 4.2 英文で 5 語程度として下さい。複合語の場合は原則として 1 語が 3 単語以内として下さい。
- 4.3 各キーワードの最初の文字は大文字にして下さい。
- 4.4 ハイフンを用いる場合, 直後の文字は小文字にして下さい。
- 4.5 具体的な意味ある語で, 狭義の名詞形を選んで下さい。
- 4.6 元素, 化合物等は化学記号でなく, フルスペリングで示して下さい。
- 4.7 語の最初に数字を用いず, また冠詞, 前置詞, 接続詞は含めないで下さい。省略形はその分野で広く通用しているものに限りません。新たに作った略語は不可とします。
- 4.8 良い例: Particle size classification, Dielectric fibrous filter, Fine grinding mill, Minimum fluidization velocity, Distinct element method  
不適当な例: Particle (範囲漠然), Residence time distribution of particles (前置詞を含む, 単語数オーバー), SiO<sub>2</sub> (化学式) → Silicon dioxide

#### 5. 投稿について

すべての投稿 (依頼原稿の一部を除く) は, 本誌の電子投稿システム (Editorial Manager<sup>®</sup>) (https://www.editorialmanager.com/jsptj/) で行ってください。本文はワード<sup>®</sup>形式, 図は解像度の高い画像形式 (TIFF, JPEG など) および作成に用いたソフトウェアの形式 (パワーポイント<sup>®</sup>, イラストレータ<sup>®</sup> など), 表は作成に用いたソフトウェアの形式 (エクセル<sup>®</sup>, ワード<sup>®</sup>, パワーポイント<sup>®</sup> など) として下さい。

#### 6. 出版倫理について

粉体工学会誌は, 出版プロセス全体を通じて高い倫理基準を遵守することを重要な責務と考えています。そのため, COPE (Committee on Publication Ethics / 出版規範委員会, https://publicationethics.org/about/our-organisation), WAME (World Association of Medical Editors, https://wame.org/recommendations-on-publication-ethics-policies-for-medical-journals) などの出版倫理ポリシーに準拠して審査・編集を行っています。特に, 以下の項目については著者に十分な配慮を求めます。

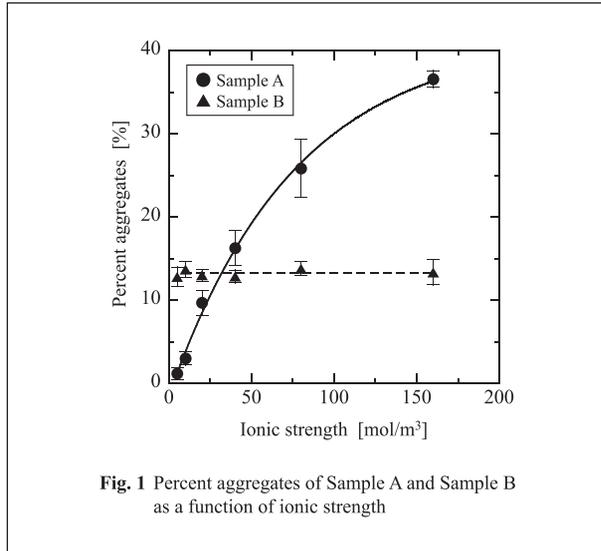
- ・著者資格: 著者として記載できるのは, 研究の構想, 計画, 実施, 解析, 解釈などに実質的な貢献をした者に限ります。
- ・研究の独自性と盗用の回避: 投稿原稿は著者自身による完全なオリジナルであることが求められます。他者の成果や文章を利用する場合は, 適切な引用を行ってください。
- ・データの開示と保存: 編集上の要請に応じて, 論文に関連する元データを提出していただく場合があります。また, 必要に応じて当該データを公開する用意も求められます。
- ・重複・二重投稿の禁止: 同一または本質的に類似する内容を, 複数の学術誌に同時に, あるいは重複して投稿することは認められません。
- ・引用および参考文献の明記: 他者の研究成果を引用する際は, 出典を正確に明示してください。
- ・利益相反の開示: 研究内容に影響を及ぼす可能性のあるすべての利益相反について, 投稿時に必ず開示してください。
- ・誤りの訂正: 発表後に重大な誤りや不正確な記述を発見した場合は, 速やかに編集部へ連絡のうえ, 訂正または撤回にご協力ください。
- ・研究報告の正確性: 原著論文の執筆にあたっては, 実験や調査の方法および結果について正確かつ客観的に記述し, 研究の意義について適切に考察してください。

- ・危険物質およびヒト・動物被験者の取扱い：危険性を伴う化学物質，手技，機器などを使用した場合や，ヒトまたは動物を対象とした研究を行った場合には，倫理審査の承認取得およびその旨の記載が必要です。
- ・患者情報・症例情報の取扱い：患者または被験者に関する画像や個人情報を使用する際は，倫理委員会の承認およびインフォームド・コンセントの取得が必要であり，その内容を明記してください。

原稿種別による書式一覧表

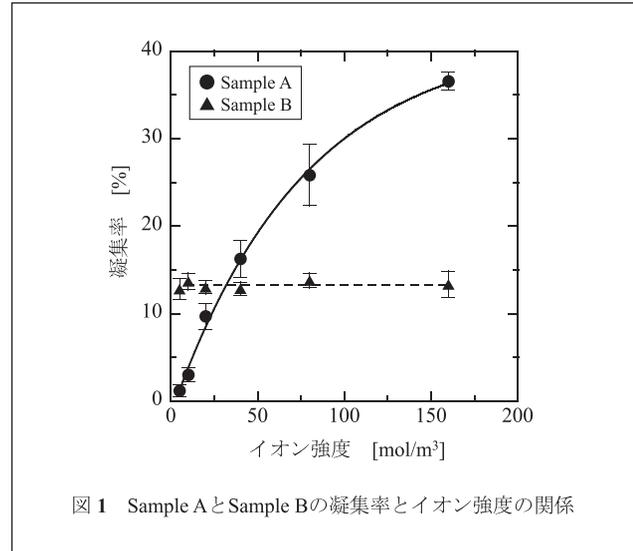
原稿種別	論文	研究ノート	総説 解説	技術資料	学位論文 紹介	講座 講義	研究・技術 情報	巻頭言
刷り上がり ページ数の目安	5	3	6	3	2	8	4	1
英文題名	必要							
英文要旨	150 語以内	100 語以内			不要			
キーワード	5 語程度							
図番号の書き方	Figs. 1, 2, Fig. 3 など					図 1, 2 図 3 など	別に指定しない	
表番号の書き方	Tables 1, 2, Table 3 など					表 1, 2 表 3 など		
式番号の書き方	Eqs. (1), (2), Eq. (3) など					式 (1), (2) 式 (3) など		
図, 表の題名と 説明文	英語					日本語		
使用記号 引用文献	英語					日本語*		
審査	査読		校閲					

\* 原典が英文の引用文献については，英文表記を可とします。



**Fig. 1** Percent aggregates of Sample A and Sample B as a function of ionic strength

論文, 解説, 総説, 技術資料投稿用サンプル



**図 1** Sample AとSample Bの凝集率とイオン強度の関係

講座, 講義投稿用サンプル

**Table 1** Atomic compositions of samples

Sample name	C [atom%]	O [atom%]	Si [atom%]
A	43.1	38.2	18.7
B	29.4	47.1	23.5
C	18.5	54.8	26.7

論文, 解説, 総説, 技術資料投稿用サンプル

**表1** 試料の原子組成比

試料名	C [atom%]	O [atom%]	Si [atom%]
A	43.1	38.2	18.7
B	29.4	47.1	23.5
C	18.5	54.8	26.7

講座, 講義投稿用サンプル

本年度より、和文誌の編集委員を務めさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いたします。今回が私にとって、初めての編集後記の執筆となります。本誌は、私にとって唯一の、学生の頃から毎号欠かさず読んでいる学会誌です。(四分法だけしか読んでいない号も含めてですが…当時の編集委員の皆様、申し訳ございません。) そのような思い入れのある学会誌の編集委員を務めさせていただくことは、大変光栄であると同時に、大きな責任も感じております。これからも本誌が、皆様の研究や製品開発を後押しできる存在であり続けられるよう、微力ながら尽力してまいります。さて、今号は2024年度の秋期研究発表会の特集号です。研究ノート1報、解説4報、新・基礎粉体工学講座(2.4.3)、DEM10およびICCCIの報告記・印象記が7報、活動報告記が1報と、盛りだくさんの内容です。編集委員会に参加させていただいて初めて知ったのですが、特集号は比較的原稿が集まりやすい一方で、一般号への投稿は少ない傾向にあるようです。近年は、英文誌での発表が主に業績として評価される傾向にありますが、私個人の実感としては、本誌に掲載された研究に対して、さまざまな業界・分野の方々から直接ご連絡をいただく機会もあり、非常に実用的な情報発信の場になっていると感じています。国内の粉体工学に携わる研究者・技術者の皆様に向けて、言語の壁なく研究成果を届けられる貴重な場として、ぜひ本誌への投稿をご検討いただければ幸いです。(YM)

本会誌は会員の皆様の原稿でつくられます。会員の皆様方からの論文のほかに、解説、総説、技術資料、講座・講義、学位論文紹介、海外報告、四分法等の一般記事のご投稿もお願いいたします。投稿表紙ならびに投稿規程および投稿の手引きは当会のホームページ(<https://www.sptj.jp>)よりダウンロードできます。投稿規程と投稿の手引きは、1号に掲載しています。

## 編集委員

委員長	飯村 健次	
副委員長	田原 耕平	
編集委員	梅本 賢	大崎 修司
	小川 法子	門田 和紀
	小澤 隆弘	近藤 光
	高井 千加	綱澤 有輝
	中村圭太郎	仲村 英也
	深澤 智典	藤 正督
	松永 拓郎	三野 泰志
	山本 徹也	吉田 幹生
事務担当	奥村 しのぶ	

## ◆ 次号予告 ◆

巻頭言	微粒子分散からはじまった粉体工学との35年	藤井 淳
研究ノート	機能性色素を固定化したナノ粒子の調製技術に関する基礎研究	田尻 隼 他
論文	湿式共粉砕によるガラス・塩化ビニル樹脂(PVC)の中和処理	野田 玲治 他
論文	多出力ガウス過程回帰によるベイズ最適化を用いた粉体製造における 粒子径分布の適応的実験計画	北村 智浩 他
新・基礎粉体工学講座 第2章 粉体の生成と生産プロセス		
2.4	粉砕とメカノケミストリー	
2.4.3	リサイクルのための粉砕操作	綱澤 有輝

令和7年9月30日印刷  
令和7年10月10日発行

## 粉体工学会誌

© The Society of Powder Technology, Japan

第62巻第10号(通巻677号)(2025)

一般社団法人粉体工学会：〒600-8176 京都市下京区烏丸通六条上ル北町181 第5キョートビル7階  
TEL: 075-351-2318 FAX: 075-352-8530  
No. 5 Kyoto Bldg., 181 Kitamachi, Karasuma-dori, Rokujo-agaru, Shimogyo-ku, Kyoto 600-8176, Japan  
E-mail: office@sptj.jp(庶務) kaishi@sptj.jp(和文誌編集) URL: <https://www.sptj.jp/>

編集兼発行人：一般社団法人粉体工学会(代表理事会長 白川 善幸)

印刷所：中西印刷株式会社  
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル  
TEL: 075-441-3155 FAX: 075-417-2050 E-mail: [funtai@nacos.com](mailto:funtai@nacos.com)